

小田桐孫一先生の思想

弘前高等学校第22代校長 小田桐孫一先生は、津軽における教育実践家であり、思想家である。先生は壇上から、生徒達に対する講話の中で、人としての生き方を説いた。多くの生徒たちはこの思想に触発され、それを人生の大きな支えとして、世の中に巣立っていた。

私は高校時代、壇上から講話を行った先生の姿を見てきた。手ぬぐいを腰からぶら下げ、原稿を手にしなげら体を揺らすように登壇する姿が今でも脳裏に残っている。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし」。方丈記の冒頭の一節を引用し、この物質至上の世にあっても、諸君はものの本質を見失うことなく寂靜に生きよ。決してこれを受験用に朗誦すべきでない、と論じた。先生の朗々と酔ったように弁ずるその姿に、生徒はよくは分からないのだが、分かったように頷きながら聞き惚れたものであった。

このたび、小田桐先生が生徒たちに語りかける肉声を記録したCDを制作することができた。また、先生の思想について東北女子大学研究紀要に、「小田桐孫一の思想(3)－教育思想の変遷－」を發表することができた。これらをまとめて、鏡ヶ丘同総会の資料として掲載いただくことになった。小田桐孫一先生が、教育家として思想運動家として、何を思考しどのように行動したのか、それらを考えるときの参考にしていただきたいと願っている。

(2021年5月 元弘前高等学校長 高橋信進)

[1]小田桐孫一先生の肉声から学ぶ

先生は、印象に残る式辞、それに対する自分の思い、時には歌を、磁気テープに記録しておくことを好まれた。この度、先生の書齋の片隅に積まれていた磁気テープの一部を、ご家族の了解を得てCD化することができた。

ここではそれらの中から、弘前実業高等学校と弘前高等学校において、生徒たちに語った3つの式辞を紹介する。また、弘高卒業式では、在校生の言葉・卒業生の言葉を紹介した。

先生の教育観、人生観に学ぶと共に、先生に育てられた生徒達が提起する学校や社会に対する鋭い思考にも目を向けていただきたい。

1 弘前実業高等学校 開講式(昭和35年9月)

(1) 初代校長としての式辞

弘前市立実業高等学校は、旧弘前商業高等学校と旧市立女子高等学校の統合により発足した。「開校記念式典」で建学の目標である「実働する中堅実業人」を目指し努力せよ、と力説した。

(2) 弘前高校へ異動するに当たっての想い (昭和43年4月)

「わたくしは、後ろ髪を引かれる思いで弘前実業高校を去り、もと居たことのある弘前高校へ舞い戻った。」

(3) 歌「北国津軽をあとにして」 (昭和43年4月)

ペギー葉山さんの”南国土佐をあとにして“の替え歌”北国津軽をあとにして“を歌う。

—————▶ 「1-1 弘実開校式」(13分)

2 弘前高等学校 昭和44年度卒業式（昭和 45 年 3 月）

(1) 校長式辞

小田桐先生が、弘高に異動してから2年目の卒業式の式辞である。

アメリカの物理学者 ハーマン・カーンが「21世紀は、日本の世紀である。」と述べた言葉を紹介し、日本人の進むべき道について語った。

—————→ 「[1-2 弘高44卒業式 式辞](#)」 (13分)

(2) 在校生の言葉（在校生代表 笹谷はじめ）

(3) 卒業生の言葉（卒業生代表 全日制 青山千賀志）

（卒業生代表 通信制 正木かずえ）

—————→ 「[1-3 弘高44卒業式 在校生卒業生](#)」 (25分)

3 弘前高等学校 昭和46年度卒業式（昭和 47 年 3 月）

(1) 校長式辞

小田桐先生が、教職を退くときの最後の卒業式式辞である。

英国ジェームス・ヒルトン著「チップス先生さようなら」の短編小説から、チップス先生の生き方と自分の生き方を重ね、人としての生き方を説いた。

—————→ 「[2-1 弘高46卒業式 式辞1](#)」 (30分)

(2) 在校生の言葉（在校生代表 三明智彰）

(3) 卒業生の言葉（卒業生代表 根本敏則）

—————→ 「[2-2 弘高46卒業式 式辞2 在校生卒業生](#)」 (22分)

[2]小田桐孫一の思想

私は公立高等学校を退職した後、第二の職場として東北女子大学に勤務し、小学校教員を目指す学生達と会った。そこでは機会をとらえて、小田桐先生の教育観、人生観を語り、教員としての生き方を書いてきた。そして、先生の残した著作や、先生が言及した作家の作品を調査し、次の3編の小論文を東北女子大学「紀要」に発表した。

小田桐孫一先生を研究される方々に、これらの資料が参考になれば幸いである。

1 小田桐孫一の思想(1)― 家族観、教育観、思想観―(2007年3月1日)

小田桐先生の思想の源流となる家族との交流、そして次第にかたち作られる教育観について述べた。先生が勤務した2つの高等学校(弘前実業高等学校、弘前高等学校)において、教育の中心に備えた思想、また生徒に向き合うとき、教師がとるべき姿勢などについて述べた。

—————→ 「[小田桐孫一の思想\(1\)](#)」

2 小田桐孫一の思想(2)― 東亜連盟思想の運動家―(2009年3月1日)

小田桐先生は、大学を卒業した後文藝春秋社の記者として活躍した。その間、石原莞爾

を中心とした東亜連盟思想に傾倒し、昭和 19 年 3 月その運動の拡大のために弘前に帰郷した。弘前中学校(新制弘前高等学校)の教師をしながら、津軽地区の思想啓蒙運動に身を投じたのである。先生を引きつけた東亜連盟思想とはどのようなものであったのか。なぜ、出版記者としての職を捨ててまで運動に没頭していったのか。郷土での運動はどのようなものであったのか、などについて述べた。

—————→ 「[小田桐孫一の思想\(2\)](#)」

3 小田桐孫一の思想(3)― 教育思想の変遷― (2021年3月1日)

小田桐先生の教育者としての勤務は、「国立多摩少年院」における補導員として、非行少年の矯正指導に当たったことから始まる。その後約 30 年にわたり、教職の道を歩いた。

教育家として津軽地区の教育に大きな影響を与え多くの人材を育てると共に、石原莞爾の提唱した東亜連盟思想の運動家として、その思想の浸透に力を注いだ。

本論は、小田桐先生が各教育現場で生徒や教員に対して何を語ったか、その根本にある思想についてどのように行動したか、などを探究したものである。

—————→ 「[小田桐孫一の思想\(3\)](#)」

[小田桐孫一先生略年譜]

- 1 明治 44 年(1911)9 月 中津軽郡和徳村(現弘前市)に生まれる。
- 2 大正 13 年(1924) 青森県立弘前中学校に入学
- 3 昭和 3 年(1928) 官立弘前高等学校文科乙類入学
- 4 昭和 7 年(1932) 東京帝国大学文学部倫理学科入学。
- 5 昭和 11 年(1936)5 月 国立多摩少年院補導として勤務。相馬愛子と結婚。
- 6 昭和 12 年(1937) 文芸春秋社入社。
- 7 昭和 19 年(1944)3 月 文藝春秋社依願退職、帰郷、母校弘前中学校に勤務。
10 月 応召により満州電信第一連隊入隊。
- 8 昭和 20 年(1945) カザフスタン共和国カラカダに抑留。
- 9 昭和 24 年(1949)9 月 復員。新制弘前高等学校に復職。
- 10 昭和 34 年(1959)4 月 弘前高等学校教頭となる。
- 11 昭和 35 年(1960)4 月 弘前市立実業高等学校発足にともない初代校長となる。
- 12 昭和 39 年(1964) 「石の言葉」発行。(なるしすの会)
- 13 昭和 41 年(1966) 「風塵抄」発行。(なるしすの会)
- 14 昭和 43 年(1968)4 月 弘前高等学校長となる。
- 15 昭和 46 年(1971) 「草沢の心」発行。(鏡陵刊行会)
- 16 昭和 47 年(1972)3 月 弘前高等学校退職。10 月 「鶏肋抄」発行。
- 17 昭和 52 年(1977)9 月 藤崎町教育委員。10 月 教育長に就任。
- 18 昭和 56 年(1981)10 月 弘前市立病院入院。
- 19 昭和 57 年(1982)5 月 藤崎町教育委員会教育長を辞職。
7 月 永眠。満 71 歳。